

本論文は読本の祖、都賀庭鐘の翻案小説集『古今奇談英草紙』（以下『英草紙』と記す）に表現された白話語彙について考察する。『英草紙』は近世期舶載された明代の白話小説集「三言」（『喻世明言』・『警世通言』・『醒世恒言』）の120篇作品を基にそこから数篇の作品の読解を通して、庭鐘によって翻案された9つの作品を収めているからである。翻案作品の文体の基本要素となる語彙は新しい漢語群である白話語彙であった。それらは日本古代以来伝統的に受容されてきた漢語とは異なり、当時の日本知識人はその語彙を唐話と呼んだが、白話という名の明代の口頭語を基とすることばであった。やがて近世日本の文人は唐話の研究と普及から生まれた唐話学の環境を得たが、それはまさに近世日本における白話で書かれた漢学であった。現代、近世の一時期隆盛した唐話学について、それなりの研究状況が展開されてきたが、それらの先行研究を検討すると、日中双方とも白話の基本概念についてはほとんど研究されてはこなかった。したがって、本論文では白話の概念を明確にすることを主な目的とし、中国語史、日本語史の双方を踏まえ検討することとした。

それゆえまず第一章では白話の概念をめぐって中国における文言、白話の概念規定の仕方に焦点を定め、その研究史を整理するとともに検討を加え、自らの白話概念の確かめを図り、検証した。つぎに、第二章では『英草紙』に表現された漢語語彙から白話と認定し得るすべての語彙1338語を採集した後、意味によって30項に分類、排列し五十音順に掲げた。分類の方法は長澤規矩也編『唐話辞書類集・第十六集』（汲古書院）に収録された「授幼難字訓」・「学語篇」の分類基準を参考にした上で考案した。また、今回の文献調査の結果をもとに、1338語から88語を選び、語の出自による整理を図った。またそれぞれの語の中日両語の語史の上での位置を定め、これらの語彙を第三章から第五章において分析検討を図った。

つぎに、第三章では日本語史において『英草紙』が初出例であると認定した白話語彙43語について論じようとした。その方法は43語を中国語史上の語の出自によって「Ⅰ語の出自が南北朝以前である『英草紙』白話語彙」、「Ⅱ語の出自が唐・宋・元である『英草紙』白話語彙」、「Ⅲ語の出自が明・清である『英草紙』白話語彙」のように語史別に分類して検討している。その際Ⅰでは以下の13語を取り上げて検討した。

「内堂」・「憂容」・「女婿」・「鋭気」・「美意」・「羞慙」・「胡言」・「外揚」・「分身隠形」・「入

舍」・「離異」・「蔬菓」・「醜聞」。

つぎに、Ⅱでは27語を挙げ、それらの語の出自によって、時代ごとに分けている。まず唐代の出自とみられる語は9語で、「花街」・「莊戸」・「丫鬟」・「依允」・「傷感」・「駭然」・「款待」・「便服」・「香燭」である。

つぎに宋代の出自とみられる語は9語で「片刻」・「化人場(頭)」・「息婦」・「新妓」・「掛念」・「熱酒」・「压手」・「(布)包袱」・「原告」である。

最後に元代の出自とみられる語は9語で「挨次」・「放鬆」・「和盤托出」・「偷漢」・「入贅」・「興旺」・「喜酒」・「板斧」・「一些」である。

さらにⅢでは3語を挙げ、語の出自によって、明代とみられる2語「嫖客」・「刮刺(的)」、清代とみられる1語「雛妓」を挙げた。

なお、第三章で検討した『英草紙』を初出例と認めうる白話語彙は、漢語文献による中国語史上での調査結果では、南北朝から清代に至るすべての時代にわたって分布していることが判明した。なかでも、第三章Ⅱに取り上げた「压手」は管見のかぎり『水滸伝』にしかみられず、独自の意味で用いられた語と考えられたが、同時に近世日本における『水滸伝』受容の如何によっては日本近世語に与えた影響関係を考がえるために一層深い調査を求めるかのようなようであった。

つづいて、第四章では漢語文献の調査によって語の出自が南北朝以前である『英草紙』の白話語彙29語例を検討することになる。さらに、日本語文献の調査結果によって日本語史における出現期を求め「Ⅰ日本近世以前に受容されたとみられる白話語彙」、「Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙」、「Ⅲ日本近世受容されたとみられる白話語彙」の3節にわけて論じた。

まず、Ⅰは9語で、「幾時」・「膝前」・「下官」・「媒人」・「檻樓」・「妖冶」・「驚懼」・「太平」・「靈位」を挙げた。

つぎにⅡは10語で「臥室」・「烟花」・「上司」・「美色」・「上等」・「人道」・「枕席」・「灯籠」・「一味」・「好生」などを取り上げている。

また、Ⅲは10語で「明早」・「心病」・「気性」・「残忍」・「性急」・「新製」・「命数」・「翫器」・「一齋」・「雅俗」などを取り上げている。

こうした中でも、「Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙」が最も注目される一群である。これらは日本では古代以来受容されてきた漢語であるが、その後、中国ではすでに意味変化し、その意味内容が白話小説に使用される

とき、明らかに異なった意味をもつ語として反映したと考えられる。とくに、都賀庭鐘の翻訳に伴って日本語において意味変化した語が今日言語学研究の領域では最も重視すべき一群だと思われる。

最後に第五章では漢語文献の調査によって語の出自が唐代以降である『英草紙』の白話語彙16語を検討した。なお、第四章と同様、日本語文献の調査結果によって日本語史における出現期を求め「Ⅰ日本近世以前に受容されたとみられる白話語彙」、「Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙」、「Ⅲ日本近世受容されたとみられる白話語彙」の3節にわけて論じた。

まず、Ⅰでは語の出自が唐代とみられる語は10語で、「両親」・「伶俐」・「話柄」・「燭台」・「酒瓶」・「被告」・「一塊」・「一宵」・「一堆」・「真個」を挙げている。

つづいて、Ⅱでは語の出自が唐代とみられる2語で、「従良」・「入調」であり、語の出自が宋代とみられる語は「役銭」の1語、唐・宋代合わせて3語を挙げている。

なお、Ⅲでは語の出自が唐代とみられる「午飯」の1語、また語の出自が宋代とみられる語は「半晌」・「債券」の2語であり、これら3語を取り上げた。

以上のように、語の出自が唐代以降に受容された語の調査では「Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙」と「Ⅲ日本近世受容されたとみられる白話語彙」の数は少なかった。なお、「Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙」に取り上げた「従良」の調査によって、今後、出典の原話が不明である第六篇の出典調査では語彙調査という研究方法を使って、また新たな発見ができるかもしれないと思われる。一方、本論の調査では「入調」の出自について、空海の『文鏡秘府論』にみられる用例にしたがって、唐代以降に受容された語に分類した。また、「入調」は唐楽の曲名として用いられることも日本文献の調査で得たもので、漢語文献ではそのような記載がほとんど見当たらず、今後の研究課題にした。

以上、本論文で検討した88語は全1338語のうちから取り出した典型例であることを断っておく。これらの語彙の大部分は日本語としては定着しなかったが、近世日本語における唐話受容の様相を窺う上で重要な位置を占めるものとする。そして、そのうちの一部の語は『英草紙』において都賀庭鐘独自と思われる読みが付され、さらには当時の唐音で表記される語もあり、また字音に添えて語の意味が左ルビとして付された語彙もみられた。